総合スポーツセンター体育館の完成と区民大運動会

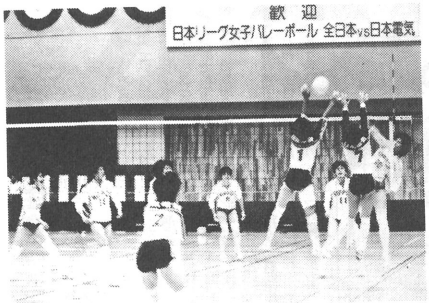
区の施設としては最大規模の総合スポーツセンター体育館（6日、開館式会場）

十月六日、奥戸七ノ十七ノ一に区民待望の総合スポーツセンター体育館がオープンし、盛大な記念式典が行われました。体育館には、大小の体育室・柔剣道場・トレーニングルームなど、スポーツの殿堂にふさわしい設備が整い、二十三区中でも最大規模を誇っています。また、正面入口には葛飾が生んだ大彫刻家・故書間弘（ひるま・ひろし）さんの遺作「雄渾」（ゆうこん）像が飾られています。この体育館開館を記念して、女子バレーボール全日本対日本電気の招待試合や、翌七日には、区民大運動会がはなやかに行われました。大運動会は、同体育館と近くの奥戸運動場を会場に、体力測定や各種スポーツの講習会、また宝さがし競走・地区対抗リレー・ゲートボール大会など、幼児からお年寄り、身障者の方など約三万人の区民でにぎわいました。記念行事はこれからも続きますので、詳しくは（財）葛飾区スポーツ振興公社☎（69）7111まで。

総合スポーツセンターには、葛飾の生んだ偉大な彫刻家・故書間弘氏の「雄渾（ゆうこん）」像が展示してある

フォト・ニュース

葛飾の秋に とびきりの SPORTS SCENE



開館を記念して行われた「全日本対日本電気」戦の選手たちも、体育館の設備を絶賛しました。全日本の山田総監督も「光線と床がすばらしい……」

◀ハンディにもめげず元気いっぱい

ガンバッタよ、ぼくらの運動会
―中学校障害学級連合体育祭―

九月二十八日、立石体育館で、中学校障害学級連合体育祭がにぎやかに行われました。

体育祭は、上平井中・綾瀬中・奥戸中・葛美中・新宿中・四ツ木中の六校から八十一人の生徒が参加し、紅白に分かれてミニサッカー・障害物競走・綱引き・パンくい競走などハンディにもめげず、一生懸命に走ったり、ボールを追いかけ汗を流しました。

特に、パンくい競走では、マットで前転し、つのドげられたパンを必死にくわえようとする姿に、会場に詰めかけた父母約八十人から盛んな拍手が送られていました。

ぬいぐるみショーで悪役に手をとられ、ドキドキハラハラ（7日、区民大運動会）

よーい、ドン。めざすはゴール（7日、区民大運動会）

飛べ、水元の蝶（チョウ）

葛美中学校　森本　峻

先日、友人と水元公園を歩いた後で、何種類のチョウを見たか聞きますと、二、三種だと言います。私は十五種ほど確認しました。その気になって周囲を見ると、今まで気がつかなかったものが、よく見えてくるということがあります。

この十年間、そんな目で水元のチョウの調査を続け、八科四十種のチョウを確認しました。緑ゆたかな葛飾を代表する水元公園、その緑は本物の自然といえるのだろうか。チョウの発生を調査しながら、公園の変化をまのあたりにし、自然とは何かを考えさせられています。

春になると、やさしい姿を見せてくれるツマキチョウ、公園の整備とともに姿を消したツマグロキチョウ、ムラサキシジミ、樹木の移植で持ち込まれたと思われるコミスジ、ミドリシジミ、山地から迷いこんできたアサギマダラなどが今まで記録されてきました。

しかし、定着するものより消えていくものの方が多く、チョウにとって住みにくいということは、それだけ自然度が落ちてきているのでしょうか。

葛飾自然のアルバム ―35―

ヒメアカタテハ

今は秋、チョウたちの季節もやがて終わりですが、気をつけて見ると、まだその姿を見ることができます。秋遅くまで隠れたまりにはヒメアカタテハが塑はねを広げ、冬でも暖かい日にはアカタテハ、キタテハなどの越冬チョウが飛び出してきます。十一月が過ぎるとエノキの根元には落葉の裏でゴマダラチョウの幼虫が来年の春を待っています。ところがこの幼虫は公園美化のために落葉といっしょに焼かれてしまう運命にあります。

都内では珍しいこのチョウを守るために、越冬幼虫を集めては安全な場所に移していますが、犠牲者の方が多いようです。水辺の柳の幹にはコムラサキの幼虫も眠っています。初夏、紫色に輝く美しい翅を見せてくれるでしょう。

水元のチョウは公園の変化と運命を共にしています。都会人の都合で、いつその生命が消されぬともかぎりません。厳しい自然の中で生きている高山チョウより、もっと大変な生き方をしているように感じられます。それだけに毎年その姿を見せてくれる時ほどうれしいことはありません。来年は一種でも多く確認されるようにと願わずにはおれません。虫が増えれば増えるほど、葛飾の自然もそれだけ本物に近づいているということになるのですから。

区民登場　こんにちは

奥戸七丁目
葛飾盆栽愛好会会長
宇佐見　平さん（75歳）
（65）

区立「鎌倉野草園」を甦（よみが）えさせるボランティア

折り目正しい、穏やかな人柄――これが宇佐見さんの第一印象でした。

宇佐見さんは十一歳の時、北海道へ渡り、大雪山系の旭岳のふもとで育ちました。「雪が溶けて山一面に黄色や赤に咲く野草のお花畑を見た時、すっとりしてしまい、まるで仙人になったような気持ちがしたと野草の魅力にとりつかれたいきさつを語ります。

区立「鎌倉野草園」（鎌倉三ノ二十二ノ一）では、来年春の草花の季節を目指して今、宇佐見さんを中心とする「葛飾盆栽愛好会」の皆さんの手で、毎日整備が進められています。

「珍しい野草をたくさん集めて、来春には、園内を赤や黄・紫に咲くお花畑にしたい」と熱意あふれる抱負を話される宇佐見さん。現在、野草も九十種ふやし、百六十種ほどになっていますが「まだまだふやしますよ」とのことです。

「野草園」については「幼稚園児や小学生たちに、幼いころから、緑の大切さを教えられれば満足です。特に、山へ行くのが困難な身体の不自由な方々にも来ていただき、自然と親しんでもらいたいですね」と望んでいます。

園内の整備に余念のない宇佐見さん（鎌倉野草園で）